

追悼

前角博雄老師を偲ぶ

駒澤大学学長 奈良康明

(一)

前角博雄老師と私は、実は、同級生である。昭和二十二年に私が駒沢大学予科に入ったとき、同じクラスに、そのころは黒田と言う名前が、老師がおられた。がっちりした体格の真面目そうな男、という記憶がある。私は半年ほどで大学を中退してしまったが、老師はそのまま駒大を出られ、師家の道を歩まれた。後に、老師がロサンゼルス禅センターを開か

れ、基礎が固まったころ、第一回の道元シンポジウムが開かれることになった。その打ち合わせの時に何年かぶりで再会し、この話がでた。二人ともに、それからたいへん親しみをもつようになつたと思う。

老師が禅センターをアメリカの地に確立されたことの意味の大きさ、意義の重要さは、百万言を要しても言いきれぬものではない。仏法とは言詮を超えた宇宙のハタラクキであると同時に、それに随順して生きることそのものでもある。

しかもなお、教化のためにはそれを言葉で表現しなければならぬ。相矛盾する要素があつて、日本人に説くことさえ難しいのに、老師はこれを言語と文化の違う欧米人に対してやってのけられた。

アメリカ人の青年を坐らせ、一対一から始めて、ここまで持つてこられた力量と努力は並大抵のものではない。私はロスのセンターに泊めていただいた際に、随分と苦勞話をお聞きする機会を得た。言葉の不自由さ、考え方の違い、禪の世界觀の欧米人への入りやすさと入りにくさ、センターという教団の運営の諸問題、人間關係の複雑さ等など、大麥苦勞をされておられた。「どうしたらいいでしょうねえ」などと言われながら、実は、老師には何時もはつきりした意思と見通しがあつた。師家としての実力と同時に、組織を作り、動かす企画性と指導力があつて、だからこそアメリカで有数の禪センター

を築き上げることが出来たに違いないのである。教団の基礎づくりと同時に、法を継ぐ人材を育て上げたことも、特筆しておかなければならない。日本国内でも、眞の嗣法の弟子を打出するのは容易ではないのに。老師には得度の弟子五十余人、嗣法の弟子十二人、印可の弟子一人を育てあげられた。そうしたお弟子さんたちが、みな、黒衣の僧形で、坐禪のみならず、社会的に実践活動を活発に行つてゐる。仏法をきちんと伝承しながら、僧侶としての、また教団としての、在りようが日本と違うのも、やはりアメリカ的な發展というべきであろう。

最近の欧米における諸禪センター形成と發展は、例えば鈴木大拙師が禪を欧米に紹介したのとは、基本的に異なるものと思つてゐる。同師の功績は主に思想としての禪の紹介であり、無論、それなりの歴史的な意味を持つてゐる。しかし、最近の禪仏教の普及は、いずれの禪セン



ターであつても、坐禅堂と本堂、衆寮を中心とする生活の本拠があり、修行者が存在し、それを取りまく信者層があり、経済的に自立している。宗教が社会に定着し、発展していくための必須条件である「教団」が確立され、定着しているのである。老師のロサンゼルス禅センターを中心とする活動は、そうした新しい機運を自らまきおこし、他の範となつたものである。

同時に、これは特に前角老師の功績だが、禅の思想研究にも大きな貢献をしている。黒田インスティテュートを中心とするシンポジウムの開催や、研究会、出版はすでに軌道にのつている。学会で評価を得ている学術研究書の出版も、すでに十冊を超えていよう。今日、アメリカでは、道元思想を中心としながら、広く日本仏教を専攻する研究者が少しずつ増えている。そのほとんどの学者がロスの禅センターを訪れ、滞在し、坐禅し、老師の教えを受けている。老師

自身の禅思想の理解の深さと表現力が、アメリカにおける道元思想研究を促進させたものと言つていい。

(二)

禅はすでに欧米の社会に移植され、根を張りつつあるのであり、新しい時代に入っている。

その一翼を担つて来られたのが前角老師だつた。それだけに、老師の突然の遷化は、今後の欧米における禅仏教の発展に少なからぬ影響を与えるであらうと思う。

今日の欧米には、曹洞宗系ではあるが、様々な系統の禅センターが活動している。いずれもがそれぞれの地域、国に定着していく最初期にあり、いろいろと難しい問題を抱えている。それだけに永平寺、総持寺両本山をふくむ曹洞宗宗門との密接な関係を求める声が強い。また私たち日本の曹洞宗としても、しかるべき援助と

激励の姿勢が必要であらう。

今後の大きな問題の一つに、真の仏法の伝承と、各地の文化との相互変容の問題がある。

道元禪師の場合をみても、中国で学ばれた仏法が、日本の社会に定着するためには、例えば言語、風習、国民性等の關係で、日本化された状況の中で実践されたし、禪師ご自身もそれに努力されている。仏法が定着するためにこそ、その土地々々の文化伝承との相互変容が必要なのである。『正法眼蔵』を始めとする宗典の日本語での思想化と表現、中国とは異なる独自の清規の発展など、その日本化の一例といつていい。同じことが欧米の禪の将来にも言える。欧米人の中で生きていく禪である以上、思想、実践、儀礼、生活様式などの面での変容は必然である。しかし、それが仏法を失うような形で行われたのでは意味がない。だからこそ、どうすれば仏法が保持されるのか、常に留意され、努力され

ねばならないものであらう。

しかし、各禪センターは小さいし、より大きなまとまりの中の互いの切磋琢磨の機会は少ない。一人よがり陥る危険性なしとはしないのである。これは私たちの曹洞宗の場合と比較すると、理解し易い。洞門の寺院は日本全国に散在しているにもかかわらず、思想、儀礼、生活等に曹洞宗として一応まとまった伝承をもっている。これは、一に、両本山への尊崇と僧堂の生活を宗侶が共有していること、すなわち、一つの教団としてのまとまりがあるからである。しかし、世界の禪センターには、相互の横の連絡は無いに等しい。といつて、日本の曹洞宗の枠内に、私たちと同じように位置づけるのは、地理的にも、言語的にも、文化的にも、組織的にも、不可能である。

それだけに、このまま放置したら、おそらく二十年くらい後には、「それでもあなたは曹洞系

の教団ですか？」と互いにびっくりするようなことになりかねないし、法の正しい伝承にも疑問が生じてくる。

したがって、今どうしても必要なのは、各センターの横の連絡をつけ、原点に戻って、共同の修行の体験を分かち合うことであろう。

この点は今日の曹洞宗、具体的に宗務庁も十分に認識していて、ここ十年ほど、世界の各センターの指導者を集めて、共同の特別摂心を毎年開いている。特にこの二年は、言葉の関係もあって、ロスの禅センターの施設を利用し、前角教師を指導者として開かれている。各国から来る指導者たちは、それぞれに師匠を異にしているものの、老師の力量と人格には、皆納得している。特別摂心はきわめて重要な機能を果たしながら、順調に、歩み出していたのである。

そして、今、老師は突如として遷化されてしまった。世界の曹洞禅の修行者グループは、今

後、「仏法」のもとに、どのように自立し、且つ協力し、相互に研鑽し、連帯していくのか。これは禅の国際的な発展のために重要な問題であろう。曹洞宗としても、各地の禅センターと話し合いながら、最善と思われる道をさぐっていかなければならぬ。それだけ、前角老師の力が大きかったということもある。

老師のご遷化を心から悼むとともに、特別摂心を一例として述べることによって、老師の大きな功績の一端を讀えるものである。

(一九九五年八月五日)